

先見経済

Management & Economic Information SENKEN KEIZAI Since1938

シリーズ・この国の未来

「すべての人を排除しないために ソーシャルファームの推進を 目指しています」

元環境省事務次官、社会福祉法人恩賜財団済生会理事長 **炭谷 茂**

聞き手 国民政治研究会理事長 **田中克人**

特集 **団塊・シニア市場のゆくえ** **村田裕之**

時論 国際ジャーナリスト **田中宇**

経営者は何を壊し、 何を守るべきか

パナソニック・中村～大坪改革にみる 中小企業生き残り戦術

元松下流通研修所代表取締役、元松下電器商学院長 **大西宏**

特集



個をつくること、
そして育てることが
企業をかたちづくる

会社は自分の能力を高め、
磨いて、社会に還元する場所

今回のゲストも前号に引き続き、今野華都子さん。エステティシャンとして優秀なだけでなく、経営者としても手腕を発揮する今野さんの従業員の育て方、そして会社をどのように考えているかなどを伺います。

タラサ志摩スパ&リゾート株式会社
取締役社長

今野華都子

聞き手/山口哲史 株式会社フロ・アクティブ代表



スタッフと一緒に 育ててくれたお客様の存在

山口 今野さんは、社員を育てる際に、その人のことを「認める」といったことを大切にしておられますよね。ですが、そうした思いがなかなか通じない人も、実際いますよね。

今野 こんなことがありました。最初に雇った女の子のことです。

お客さまとして来ていたのですが、私が腱鞘炎になってしまい、肩もみのサービスができなくなったことがありました。そのとき、肩もみが得意と聞いたので、アルバイトとして入ってもらったんです。

でも、その子は無愛想で、お客様に「ありがとうございます」とも言わない。それを注意すると無言でいらんだり、あまりよくない言葉を投げかけられたりしました。

山口 それはよくないですね。どうされたのですか。

今野 もともとアルバイトでしたので、辞めてもらうのは簡単なことでした。

でも、そうしたら、この子は社会のどこで働いたらいいのだろうと考えて……。

山口 お人好しですね(笑)。

今野 お客様から言われました(笑)。

しかし、そのお客様に「一緒に育ててください」と頼んだら、笑って協力してくれました。以来、その方は来られる度に、



【ホスト】山口哲史 Yamaguchi Tetsushi

1961年兵庫県生まれ。関西学院大学商学部卒業後、リクルートなどを経て90年、現(株)プロ・アクティブの前身のフィールド・アクティブを設立。竹100%でできた繊維など自然でピュアなエネルギーを活用した「人を自然に輝かせる(ラディアンス)」力のある健康、美容商品の企画・販売を手掛ける。社内外ともに「ガッツさん」の愛称で親しまれている。

<http://www.pro-active.co.jp>

アルバイトの子のよいところを見つけて声をかけてくださいました。

私は私で、仕事を教える以上、厳しいことを言わなければと、基本的なことから一つひとつ教えていったんです。

とはいえ、当初は、その子にとって、それが負担だったようです。

山口 何かあったのですか。

今野 あるとき、「もう来ねえよー」と扉を思い切り閉めて出て行ってしまったんです。私もつい「来るな」と言ってしまった……。

でも、そのあとに追いかけて「明日も来い！」と(笑)。

山口 来ましたか？

今野 来てくれました。そのほかにも、いろいろなことがあり、一つひとつ教えるのではなく、どうしたらこの子が納得できるのか。そのことを中心に考えるようになりました。

自分の子と思えば 引き取って育てられる

山口 しかし、理屈は分かっているけど、そこまで社員のためにできる経営者は少ないですよ。

今野 それは、「損得」だけで考えてしま

うからではないでしょうか。もつとも、その子にも、なかなか分かってもらえませんでしたけどね。

ですが、「損得」という判断基準ではなく、これをやったらお客様や私が喜んでくれるだろうか。それを良心の基準としてほしい。

相手に喜んでもらおうとやったことならば、何が起きても私はあなたをかばう」と話し、その子と向き合い続けました。

山口 なぜ、そこまでできるのですか。

今野 どうして、この子はこうなったのか。それを考えてみたのです。

それは生まれた環境によるものかもしれない。もし、そうならば、ひよっとしたら、私自身が彼女だったかもしれない。

そして、私だったのなら、生きていられなかったのかもしれない。そう考えたら、とても彼女が愛しくて。

そう考えると、その子が悪い、学校が悪いという問題ではなく、社会に生きる大人の責任として、この子を何とかしなくてはいけない。それができなくて、お客様に何かをさせていたくなどとはできない。そんなふうに思ったのです。

それに、私はスタッフたちによく「拾い子をする」と言う表現を使います。彼女たちには失礼かもしれませんがね。

山口 それは、どのような意味ですか。

今野 自分の子ともなれば、「あなたはいらない」とは言えませんがね。何があっても、その子が自分の子ともであると思えば、

引き取って育てられるはずですよ。そうした意味で使っています。

山口 結局、その子はどのようになったのでしょうか。

今野 3年くらい経ったときでしょうか。あるお客様が、その子のことを褒めてくれたんですね。嬉しくて、涙が止まりませんでした。

山口 流石と言うか、すごいですね。

今野 でも、すごいのは社会の大人の責任として一緒に声を掛けてくれたお客様です。そして、何よりも認められるべきは、その子ですよ。決して、私ではありません。

山口 今野さんでなくては、なかなか言えない言葉だと思いますが、その通りなんですよ。

ところで、その子は今、何をしていますか。

今野 私のところにいます。今では、何もかも安心して任せることができ、自分が育てられたのと同じように、サロンのスタッフを育ててくれています。

人生の目的や 人間の幸せとは何か

山口 今野さんは、人間にとって、何が一番幸せだと考えておられますか。

今野 それは「自分を活かすこと」ではないでしょうか。

山口 自分を活かすことですか。確かに、自分自身の持つ力を活かすことができ

自分自身の持つ力を活かせれば、それは幸せなことですね